

問題一

問一	ア	イ	ウ	エ	オ
	円滑	偶然	緊張	握	隔
問二	<p>中世ヨーロッパでは、教会を中心に都市が建設され、日本でも、縄文時代には、死者は、集落中央の広場に埋葬され、有史時代にも、寺社が都市の公共空間の枢要に位置していたというこ と。</p>				
問三	<p>実在に対するリアリティを共有する神の判決によって、集団同士が直にぶつかりあうことを防 ぎ、人間関係を穏やかにし、対立を避けることができるから。</p>				
問四	<p>人の住まない山は神の支配する領域であり、狩りという行為は、神の支配下にある動物を分け ていただく儀式であるという認識。</p>				
問五	<p>かつてカミは、人々と交流し、その実在を共有されることで、人物間、集団間、国家間の緩衝 材の役割を担ってきたが、近代は、カミは排除され、ヒューマニズムを社会の土台とするよう に変化した。</p>				

問題二

問一	<p>毎日の生活が種々の繰返しばかりで成り立っており、それが自分の癖になりきり、同じことの 反復繰返しに疑問を感じることも恥ずかしがることもなく気味悪がることもないということ。</p>
問二	<p><b>表現法（擬人法）</b> 杏子は物を食べる時の癖の反復を見られたくなく、恋人とともに食べるよう姉に振舞われたケ ーキと紅茶を前に、食べる勇気を出せるかどうか非常に緊張しているから。</p>
問三	<p>神経質な杏子が中途半端に自分の癖を気にして反復を恥ずかしく思うことをやめ、自分にも相 手にも癖があることを認め、お互いに釣合いを取って「健康」になればよいということ。</p>
問四	<p>自分の食べ方の癖を意識し、その反復を恥ずかしく思いながらも、杏子の前でぎこちなく物を 食べ続けなければならないことに潜む、生きていく上で動かしがたい根源的悲嘆。</p>
問五	<p>姉への嫌悪感は根本で自分への嫌悪にもつながっており、自分の癖の反復に羞恥心を持ち、繰 返しを気味悪がるほど神経質であったが、恋人の適度な距離感を保った接し方を素直に受け止 め、「健康」になることは簡単だと思えるほど気持ちに余裕が生まれたから。</p>

問題三

問一	ア	きっと国が減んでしまうだろう
	イ	ご準備をしてさしあげて
	ウ	どのようにお聞きになったのだろうか
	エ	どうしてそのように控えているのか
問二	石山寺への行幸がたび重なり、近江国に負担がかかることを聞いて、費用を準備しようとしたから。	
問三	石山寺行幸による疲弊で漏らした言葉を、帝がどのようにお聞きになったのかと怖れ不安になった近江の守は、帝にお会いすることを遠慮し、仮屋を作ることでご挨拶の代わりとしたから。	
問四	さざ波が絶え間なく岸を洗っているようでございますが、渚がきれいであつたら亭子の帝がお泊りになってくださると思つてのことでしょうか。	

問題四

問一	ア	よつて
	イ	つひに
	ウ	より
	エ	ゆゑに
問二	どうして一晩の飢えを我慢せず、極限が無い殺生を臣下たちに教えるべきだろうか、いや、教えるべきではない。	
問三	喉が渴いた仁宗が湯茶係に茶を命じていたら、不在であつた湯茶係が職務怠慢の罪に当たり罰せられていたということ。	
問四	きかつすらなほしのぶべし、いはんやそのたのことをや。	
問五	自分の一言によつて臣下が無用な殺生をしたり、罪に問われたりするなど、皇帝の発言には多大な影響力があることを熟知し、自分の欲を抑えて臣下のことを思いやる点で賢君である。	